

琉球大学学術リポジトリ

琉球弧における民間治療師の評価に関する研究：
ユタ・ヤブー・ムヌスーなどの知識人類学的研究に
向けて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学島嶼地域科学研究所 公開日: 2020-09-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: サワトウキェビッチ, ミハウ マテウシュ, Salatkiewicz, Michal Mateusz メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/46731

【研究論文】

琉球弧における民間治療師の評価に関する研究

——ユタ・ヤブー・ムヌスーなどの知識人類学的研究に向けて——

サワトウキェビッチ・ミハウ・マテウシュ※

Social Evaluation of Traditional Healers of Ryukyu Archipelago
Towards the Study from the Perspective of Anthropology of Knowledge

Michal Mateusz SALATKIEWICZ

要旨

本稿は本格的なフィールドワークに先立って、琉球弧の「ユタ研究」を知識人類学という観点からレビューを行い、その問題点を明確にした。「ユタ研究」の先行研究を文化人類学史のパラダイム転換に即して理解しなおすと、「ユタ」という語自体も知識の評価であり、その他「職能」として捉えられてきたムヌスー、ヤブー…といった語もまた知識の評価にすぎない。つまり、こうした語は主として女性の霊力・霊威に対する、学術、民間を問わず、知識の評価であるという観点が欠落していたのである。ゆえに、今後は間主観的にこうしたカテゴリーが構築されることに留意したフィールドワークを参与観察と IT 空間の領域で行っていききたい。

Abstract

The goal of this paper was to review so called “yuta studies” from the perspective of anthropology of knowledge and set goals for upcoming field work. Through reexamination of aforementioned “yuta studies” in the light of change of paradigms of cultural anthropology, it became clear that the term “yuta” itself is just a type of social evaluation. Accordingly, the same applies to “munusu”, “yabu” and many other words formerly used to depict a certain “work ability”. The fact that these terms are types of social evaluation, regardless of whether they are done by ordinary citizens or scholars, was omitted in previous studies. To examine the process of construction of these intersubjective categories, the author aims to conduct field work which includes method of participant observation as well as research in the IT field.

※ 琉球大学大学院人文社会科学研究科専攻博士後期課程
Ph.D. Student, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of the Ryukyus.

はじめに

琉球弧の文化人類学（民俗学も含む）において、しばしば「ユタ」と称される人々についての研究は、この地域の特殊な文化として古くから耳目を集めてきた。一般的に「ユタ」は、人類学的にはシャーマンと分析されることが多く、現在でも琉球弧全域には多くの「ユタ」が活躍し、彼らを利用する人も少なくない。さらに、これまでなされてきたユタについての研究も、膨大な数に及んでおり、本稿でそれらを網羅的に言及することは不可能である。これらの研究は、人類学を始めとして、民俗学、宗教学、社会学、歴史学といった多方面にわたる分野から行われてきた。こうした研究領域をここでは「ユタ研究」と呼ぶことにしておこう。また、一般的には呪医として分析されてきた「ヤブー」についての僅かな研究も、「ユタ」並びに「ユタ研究」に包摂されるような形で、本稿において扱うこととする。そのうえで、知識人類学の立場から従来の「ユタ研究」をレビューし、その読み方を刷新する視点の提示により、この研究を人類学の流れに位置付けるということが、本稿の目的である。

「ユタ」という呼称は、元来は差別的なニュアンスを持つ語であり[塩月 2012 : p.74]、それを行う人ないしその人が有する知識についての他人からの一種の社会的評価であり、「ユタ」本人が名乗るものでも公認された職業でもなかった。一般的にはユタとは、沖縄本島を中心に奄美諸島から先島諸島にかけて、琉球弧全域で現在においても活動を行なっている呪術・宗教、巫者的職能者と理解されている。その職能者は、「ユタ」という総称で広く知られているが、その呼称は蔑称でもあるため、それ以外に、カミンチュ [神に仕える人]、ムヌシリ [物知り] [大橋 1998 : p.20]・ムヌスー[東 2018 : pp.57-58] [物知り]、またはウグワンサー [御願者] やハンジ [判じ] 等と呼ばれることもある。さらにトキ、サンジンソウ [三世相]、シムチ [書物繰り] [桜井 1973 : p.215]、ヤブー[Lebra 1985 : p.92] といった類似した語も知られている。こうした人々は呪術・宗教・巫者的職能者として分析され、彼らの知識は一種の専門分化した「職能」であるかのように分析されてきた。

しかし、こうした呼称は、一人の女性¹⁾の生き方や知識についての評価にすぎず、社会構築主義的に考えれば、近代化の過程で社会的に構築されたものである。存在論的にいえば、「ユタ研究」とは、琉球弧の女性の霊威・霊力に対する信仰についての知識への評価の研究であるということができ、一人の女性の評価に複数の解釈があってもおかしくない。つまり、ある人にとってユタである人が同時にヤブーであったり、ムヌスーであったりしても問題無いはずである。それは正確に言えば「職能」というよりも、知識に対する他人の評価といったほうがよい。こうした評価が「社会的」になる過程こそが分析されるべきであろう。

大まかにいえば、世界中で起きてきた「近代化」という過程において、合理化されてしまわない人間の生への葛藤であり、従来その人々はシャーマン、民間巫者、民間治療師等として分析されてきた。今やインターネットでは「ユタ」自らが「ユタ」として自分のライフヒストリーや自身の神秘的な体験を語る時代になっている。また人類学等の分野を学び、「ユタ」自身も学問の権威を借りることもある。さらに「ユタ」並びに「ヤブー」や「ムヌスー」等と称される人々は、民間治療に重大な影響を及ぼし、民間治療もまた彼らの大きな職分領域となってきたことが間違いない。そのため、本稿の表題で彼らを総括的に「民間治療師」と呼ぶこととする。

文化人類学の学説史における社会進化主義、文化伝播主義、機能主義、新進化主義、構造主義、社会構築主義、現象学的人類学、存在論的人类学といった学説のパラダイムの変化も、近代化の過程とエスノグラフィックな情報の増加とに関連していると考える。本稿で示すように「ユタ研究」という研究領域は、こうした不思議な現象の説明の様式の変化を考えるのに適した研究領域である。本稿は従来の「ユタ研究」の主な先行研究を知識人類学の立場からレビューするとともに、記録としての先行研究の読み方をも刷新する視点を提示することを目的とする。それにより、今後の本格的なフィールドワークへの新たな視点の提示を図りたい。

1. 知識人類学について

文化人類学的な研究においてエスノグラフィックな情報が増加し、社会の流動性・多様性・表象される人々への配慮が必要になってくる中で、単純にある人々があることを信じているといった素朴な文化表象が批判されるようになった。知識人類学もそうした民族誌批判の中で出てきた世界的な思潮のひとつであったといえることができる。

しかし、マルコム・R・クリックが「年報人類学レビュー」に発表した「知識人類学」というレビューの中で、知識社会学、知の考古学という研究分野が確立されているものの、知識人類学という分野の創設に対し、疑問の声を上げている。既存の連字符人類学が多様であるが、それらは人類学の主流から遠く離れたり[Crick 1982 : pp.287-288]、またはその理論の内容が名を伴わなかったりすることが多々あるのである[伊藤 1991 : p.98]。次いで、「知る方法」や「知識」という概念は、どの人類学的な研究においても社会生活を理解するために基本的な役割を果たしている。その概念が定義可能な範囲内にあるかぎり、人類学をより細分化するような知識人類学という研究分野の創設は不要であり、かつ反生産的であろうとクリックは述べている。また彼は、知識人類学を研究分野としてではなく、むしろ昔ながらの人類学の主たる関心事を思い出させる存在として把握しており[Crick 1982 : p.287]、ドミニク・ボアイエもまた、その意見に賛成している[Boyer 2005 : p.147]。

社会人類学者の伊藤泰信もまた、以上のような知識人類学を研究分野としての確立による人類学の細分化への批判を認めているが、これまで人類学においてキーワードとなってきた「文化」や「伝統」等を「知識」に変更することにより、議論の活性化、また明確化を導く可能性があると言えるであろう[伊藤 1991 : p.98]。社会人類学者の小池誠の言葉を借りるならば、知識論は「人類学の新しい可能性を開く1つの武器になると思われる」[小池 1991 : 193]のである。なお、先述した活性化、また明確化というのは、新しい論点の提示よりも、知識社会学が孕んだ問題だけでなく、他の議論における諸問題（イデオロギー論、マルクス主義的問題、あるいは認知科学理論、実践理論等）との橋渡し、さらにそれらが交差する議論の場を作り出すことである[伊藤 1991 : pp.98-99]。従って小池は、知識人類学的な研究というと、それに認識人類学や象徴学が含まれるという見解を示しており[小池 1991 : p.193]、エマ・コーエンも知識の獲得、その保持、陳述といった問題を理解する上で、そのような問題を取り扱う他の研究分野による成果を無視することができないと強調している[Cohen 2010 : p.194]。

以上のように、知識人類学的な研究には、さまざまな理論がある。系譜等の歴史的知識や地理的知識に関する研究を初め、知識社会学、現象学的社会学等の知見を受け継ぎ、発

展された理論であったり、認識論、認知理論[伊藤 1991 : p.109 ; Cohen 2010 : pp.193-194]であったり、知識人類学的な研究は、確立されている分野ではなく、むしろ知識に焦点をあてる広範囲な研究領域と言えよう。

日本においては、台湾原住民の有する系譜等の歴史的知識や地理的知識に関する研究に携わった馬淵東一は、始めて1930年代に知識人類学という研究分野の必要性を訴えており、それに関する言及は「高砂族の系譜」という論文の追記にある[馬淵 1974 : p.234]。しかし、馬淵以降、知識人類学という分野の確立が求められることはなかった[小池 1991 : p.193]。

社会人類学者の渡邊欣雄は、ユタについては言及していないが、『民俗知識論の課題—沖縄の知識人類学—』という画期的な研究書を書いており、その中で沖縄における親族論、風水論、歌謡論を進めている。渡邊は知識を民俗的知識（それを話者の知識と呼ぶ）と人類学的知識（即ち人類学者の持つ知識）に区別をつけている。彼は、知識の成層性・拮抗性・正当性、知識の正当化の原理について言及しており、さらに知識の伝統性・非伝統性、知識の貯え、つまりその社会的配分といった問題群を挙げ、知識人類学的な理論を展開している[渡邊 1990 : pp.12-53]。

社会人類学者の小田亮は、「沖縄の『門中化』と知識の不均衡配分」という論文を発表している。その中で、渡邊により作成された知識論を部分的に発展させており、とりわけ知識の成層性に関する理論を拡大し、知識の社会的配分（即ち知識の不均衡配分、権威構造）の課題について独自の構想を示しながら[小田 1987 : pp.366-370]、沖縄における「門中化」という問題設定を検討している。

小池誠は、知識の多様性とその意味について論じている。なお、話者（インフォーマント）と調査者（即ち人類学者）という二者の関係、その知識の陳述への影響について論じている。かつ現象学的社会学の創始者とされるアルフレッド・シュッツが提起した知識の社会的配分における関連性構造やそれに関する彼による幾つかの理念型といった問題群に言及している[小池 1991 : pp.194-195]。

さらに伊藤泰信は、人類学と知識人類学に見られるヨーロッパの知識社会学とアメリカの知識社会学に連なる人類学的、また知識人類学的な問題設定を紹介している。かつ知識という基本概念について論じており、人類学の人類学という自己回帰的な性質を持つメタ人類学という知識人類学において必ず生じる課題について言及している。そして知識の状況依存性、文脈依存性、知識の拘束性、状況認知理論という課題は、彼の論文において主な考察の対象となっている[伊藤 1991 : pp.97-127]。

知識人類学は大まかにいえば、現象学的人類学の流れに位置づけられるべき分野であり、社会構築主義、存在論的人類学の結節点にある。上述した渡邊と小田により沖縄研究にも先鞭が付けられたにもかかわらず、「ユタ研究」にはあまり発展したようにはみえないのは知識人類学が研究分野として確立しないまま霧散していったからだともいえる。特に民俗学の分野で知識人類学的転回がなかったのは、沖縄在住の民俗学研究者自身の社会的立場にはそぐわないということもあり、その影響は低調であった。しかしながら、「ユタ研究」に新たな展開があるとすれば、ユタ本人が語る宗教的ドキュメントと研究者による分析の間には何らかの枠組みが必要であろうし、沖縄の社会や文化の動的な研究にとって重要であることは疑いない。また、こうした知識人類学研究は筆者のような立場には有利だといえる。

2. 「ユタ」とその発生をめぐって

これまで述べてきた知識人類学という立場は、文化人類学史においては、現象学的人類学の一つである。近年、稲村務は日本民俗学の指導的立場にあった柳田國男を民族学者（文化人類学者）として捉え直している[稲村 2016 ; 2017a ; 2017b]。その意味からいうと、従来「民俗学」と捉えられてきた「ユタ研究」を文化人類学史に位置づけ直すことができると考える。

ユタは、祖先霊等の超自然的存在と直接交流が行える能力を持ち、市民社会²⁾において私的な宗教的・呪術・巫者的領域に関与しているとみなされてきた。なおその生得的な霊的能力に基づきト占や死者儀礼を執行したり、吉凶等を判断したり、病気治療を施したりし、苦しみに陥っている人々に助言を与え手助けをしようとしている。かつてユタには、研究者や新聞に「巫女」という字が当てられていた[大橋 1998 : p.20]が、1960年代後半にウィリアム・P・リーブラは、初めてユタを「シャーマン」というカテゴリーの中に当てはめて紹介している[Lebra 1966 : p.80]。

かつ、琉球の市民社会において個人的な呪術的・信仰領域に属するとみなされてきたユタ以外に、宗教的職能者として、村落等の公共的な祭祀を司ったり、共同体の祈願行事、御嶽等の宗教行事に携わったりするノロ [祝女] という祭司が活動を実施している。ノロと並んで、ニーガン [根神] やツカサ [神司] 等は、カミンチュ [神人、神女] というカテゴリーとして捉えられてきた[桜井 1973 : p.3]。このような巫者と司祭との共存、あるいはシャーマニズムと異なる別の信仰・宗教との共存は、汎世界的の現象である[Szyjewski 2005 : pp.5-6 ; Eliade 2011 : p.30]。従って、1980年代になると佐々木宏幹は、ユタをシャーマンとして、ノロをプリーストとして位置付け、両者を初めていわゆるシャーマン・プリーストの枠組みの中で整理を加えている[佐々木 1984 : p.242]。

なお、ユタとノロとは共存してきた相入れない関係にあるものとされてきた。だがしかし、その両者は元々源流が同一であるという発生説が桜井徳太郎により唱えられた。初期の段階において民間巫女としてのユタの民間信仰的領域とノロ等の祭司的領域とは、完全に未分化状態にあり、その一貫調和していた時代が相当長く続いていたが、次第に専門化がすすみ、両者の領域は分化していったと桜井は述べている[桜井 1973 : p.204 ; 1979 : pp.143-145]。

とはいえ、上述のような発生説がいくつか提唱されてきたが、その定説がない[大橋 1998 : p.61]。例えば、コデという男系同族の神女の中で、神託を宣伝する霊力を有しない者もあり、これらに代わってそのような霊的能力の所有者が民間に出始めた。これをもって職業化し、ますます職掌を広げていったのは、トキとユタであろうという伊波普猷による説等が挙げられる[伊波 2014 [1913] : pp.18-25]。

しかし、その発生説を問わず、両者の職掌領域は、一旦分化し明確に区別が付けられ、混同することはなかった。ところが、ユタの公的領域への関与、またはノロ等の個人・家族レベルにおける問題への対応がよくみられる[桜井 1973 : p.204 ; 大橋 1998 : p.24]。このように両者は共存してきたが、歴史上においてユタとノロとの社会的地位やこれらに対する評価・態度等には、圧倒的なギャップがみられる。

従って、人類学の分野でも民俗学の分野でも、戦前からなされてきた研究も同様の傾向

を示している。その重点は、ノロであり、ユタではない。その理由のひとつとしては、ユタへの弾圧の長い歴史があるということが挙げられる。しかし、ユタを取り上げた研究者が誰もいないという訳ではないが、僅か二人だけである。その二人の研究を出発点として、従来の「ユタ研究」を以下で主にまとめることにする。

3. 「ユタ研究」について

その一人は、「沖縄学の父」と呼ばれる伊波普猷である。ユタが絶滅しないうちに、これらを可能な限り研究するようにと、柳田國男に勧められた伊波は、ユタの問題を正面から取り上げ、『ユタの歴史的研究』（1913）という論文を新聞紙上に発表している。その論文の中で彼は、固有の民間信仰の特徴、ユタの発生説、ユタの歴史的経緯、これらが置かれた社会的地位、また男性シャーマンのトキ等について、歴史資料を基にしながら考察を行っている。なお、沖縄固有の文化や歴史に高い価値を見出し、弾圧に見舞われていたユタとユタを信じる人々に同情しているものの、当時の伊波は「進化論」に熱心であった。即ち彼は、ユタをめぐる信仰を礼賛する訳ではなく、むしろ迷信打破と近代化の推進する必要性を感じ、それを訴えている[伊波 2014 [1913] : pp.66-67]。

さらに、文化進化主義の影響を受けた民俗学者である佐喜眞興英は、柳田國男にも示唆され、自らの故郷となる宜野湾村新城について『シマの話』という民族誌を書いている。その中で、ユタがする口寄せの現象、祖霊の供養、その継承とその際の禁忌について述べている。なお彼は、病気になるとほとんどの人々が医者ではなく、ユタを頼むということが通常であると説き、病気を治す等のマジナイを紹介している[佐喜眞 1925 : pp.123-129]。また彼は、ヤブーの治療能力とその範囲、病理観や災因観等を紹介し、ヤブーに対してドイツ語の *Medicin-Mann* という語を用い呪術的な能力を持つ異能者として見なし、呪医として既定している[佐喜眞 1925 : pp.87-90]。なお沖縄の日本への同化が促される中では、佐喜眞はユタを「古琉球の生きた祖先崇拜の維持者」と客観的に評価している[佐喜眞 1925 : p.121]。

両氏の研究は明治の社会文化進化論を背景としており、ユタを原始的な信仰の進化の段階とする視点から免れてはいなかった。伊波の「日本文化の原型を保存している天然の古物博物館」という沖縄観は、進化論的思考をよく示している [伊波 1974 : p.28]。こうした視点は、タイラー、フレイザー、バツハオーフェン等の進化主義人類学理論によるものではあるが、それは単に西洋人類学の受容というだけに止まらない。沖縄の日本社会への一体化を目指した明治期の一般的な風潮にそれが枠組みを与えたものであった。沖縄の知的な代表人物たるその両氏により取り上げられるほど重大な問題であったといえるが、「ユタ」は日本のナショナリズムの高揚とともに撲滅すべき前近代の陋習の社会的なラベルとして構築されていく。

なお、かなり昔から、即ち薩摩侵入事件後の近世期から戦時体制が整えられる時期までは、ユタは前時代の迷信であるとされ[高良 1989]、学問の主対象となることはなかった。だがしかし、一転して戦後になると「ユタ研究」という研究領域が活発化する傾向が見られ、どんどんユタに学者の関心が寄せられていく。

その研究の先駆者としてはウィリアム・P・リーブラが挙げられる。彼は、機能主義的

な立場をとり、現地調査を基に『沖縄の宗教と社会構造』を書いている。彼はその随所でユタにふれ、沖縄の宗教が全体として衰退するが、「それとは対照的にユタだけは根強く存続している」と述べている。リーブラはユタを初めて「シャーマン」というカテゴリーに当てはめ、その資質、入巫過程とその条件、活動の種類、また霊力による災因の解釈とその対処方法の提供をこれらの主要な機能として紹介している[Lebra 1985 : pp.79-85]。なお彼は、ヤブーの呪医としての資質とその仕事内容、男女別による性格や役割分担の差、ユタとの相互補完性、役割分担、ヤブーの管轄する民間療法へのユタの関与をも論じている[Lebra 1985 : pp.91-92]。

また桜井徳太郎の『沖縄のシャマニズム』は、民俗学的研究として従来捉えられてきたが、そこに機能主義の影響を受けた暗然の仮定が読み取れよう。彼は、リーブラと同様にユタをシャーマンとして位置付け、ノロに比してユタに関する調査研究がほとんど等閑に付されてしまったという批判を加え、その重要性を訴えている[桜井 1973 : p.4]。彼は、ユタの弾圧、その成巫過程の条件、死者供養の諸儀礼、活動の範囲、ユタによる宗教教団の組織化といった多岐にわたる研究成果を紹介、予言者や呪医等のいくつかのユタの機能をまとめている[桜井 1973 : p.211]。さらに桜井は、個々の書物でヤブーの職掌領域、性質、ユタとの関係性等についても述べている。民間医術の施行者としてのこれらは、以前民間医療者でもあったユタから分化した存在であるというヤブーの発生説を提唱し[桜井 1973 : p.392]、ユタという呼称は、ヤブーという語から由来するであろうと推察している[桜井 1984 : p.111]。またユタは、位牌継承・財産相続、祖先祭祀等を通して地域社会の構成原理にもその影響を及ぼしていると、桜井は主張をしている[桜井 1973 : p.205]。

桜井の研究は、柳田の強い影響を受けた多くのものの一つであるといえよう。それらの多くがイギリス人類学系の機能主義をその解釈枠組みとして採用し、桜井の琉球文化の維持者としてのユタという視点も、進化論的思考から機能主義なパラダイム転換をよく示している。なお前記のユタの発生説は、ヤブーの発生説と同様に柳田から受け継がれてきた多系進化論ともいえよう。リーブラは、歴史的関心を持ちながらも、沖縄の地域社会の生活とユタを含めて宗教的要素との機能的関連を探っている。両氏の研究は進化論的パラダイムとは違い、彼らはユタを撲滅すべき邪教としてではなく、共同体的機能が重要なシャーマンとして評価して分析を行っている。それ以降、同様な位置付けがなされる傾向が学界に定着していくのである。

なお宗教人類学者の佐々木宏幹は、構造人類学的な立場をとり『シャーマニズムの人類学』を発表している。その中で桜井等のおこなった現地調査のデータを再検討しながら、通文化的な観点からユタに関する論考を深めている。入巫に関する類型論を論じた上で、ユタを召命型シャーマンとして規定し、[佐々木 1984 : p.230]その特質を分析している。さらに彼は、ユタをシャーマンとして、またノロ等の神女をプリーストとして整理を行い評価しており、初めてシャーマン・プリーストという枠組みをユタ・ノロ関係に適用している[佐々木 1984 : p.242]。ユタの成巫過程とその間にみられる霊的巫病であるカミダーリについて記述を行い、ユタをめぐる信仰を東南・南・東アジア等における同類の現象との比較を通して、アジアのシャーマニズムについての包括的な研究を試みている。

これらのシャーマン・プリースト論は伊波や佐喜眞とは違い、機能主義と多系進化論の流れから構造論の萌芽期に位置付けてよいだろう。こうしたシャーマン・プリースト論の

ような二分化の定義に収まるような様子の探求、言葉を変えていけばものの分け方に特別な注意を払うということが、構造論を特徴付けていることである。従って佐々木は、脱魂型と憑依型とに大別して二つあるシャーマニスティックな人物が超自然的存在と直接的に接触を行う仕方を論じるということも、その例の一つとなる。またそもそも同列とはいえないユタとノロを「二項対立」または「両義的」と解釈する思考は、弱い構造論として捉えることができる。しかし、佐々木の研究以降ユタは、シャーマン・プリーストという枠組みの中で分析されていく。

次に心理人類学・医療人類学的にユタを扱った研究としては、大橋英寿の『シャーマニズムの社会心理学的研究』が挙げられる。ユタのライフヒストリーを基にしたこの書物の中で彼は、ユタとそのクライアントを含む沖縄社会との関係、ユタになるプロセスの展開と霊的巫病の事例研究の成果を紹介している。なおユタの性質や世界観、これらに特異的な変性意識状態とそのさいの行動の検討を行っている。加えて彼は、信仰治療と現代医療の機能関連、沖縄社会に浸透している世界観・病気観・狂気観等について述べている。医療人類学の影響を受けながら、ユタをめぐる信仰に内在している治療的側面が沖縄の民間療法を中心となっていると強調し、「危機への対処システム」においてユタは「野のカウンセラー」という役割を果たしていると言っている[大橋 1984 : p.692]。

大橋以外には、久場政彦は医療人類学的な視点を取り入れ、実地調査によるデータを基にヤブーを中心とした研究を著している(1986)。リーブラ等の研究を批判的に考察しながら、ヤブーを呪医としての男女別による性格・役割の差、霊的資質の有無、病理観、知識と役割継承、呼称、またヤブーとユタとの関係性、相互補完性、相互評価等、多岐にわたる論考をなしている。なお文化人類学者の滝口直子は、宮古島のムヌスやカンカカリヤ等という人々をシャーマンとして、そのライフヒストリーを心理学的に分析している(1991)。ムヌス等の世界観、儀礼、治療体験に注目を払い、これらを民間心理療法家としての特質を描写している。このように、ユタを心理学人類学・医療人類学的に分析する研究がなされるようになり、ユタへのまなざしが大きく変化していく。

さらに、近年に著された『治癒と物語—南西諸島の民俗医療』という文化人類学者の東資子の研究がある。この医療人類学的研究は、存在論的転回をよく示している。その中で東は、ユタは沖縄の宗教的世界と民俗医療における影響力の高い存在であるとし、これらによる物語を通して人々の医療観・世界観等が形成されていくことを論じている。従来から、ユタに近い語としてヤブーやムヌスといった語はよく知られており、同じ人物がユタともムヌスとも呼ばれ[東 2018 : pp.57-58]、霊的な判断を行うのがこのカテゴリーであり、物理的な施術を行うのがヤブーであると東は説き[東 2018 : pp.132-134]、外科的な治療師と災いの原因を明かすト占の専門家について記述している。なお物語論を用いながら、一般の生活者の視点から民俗医療の全体像を解明しようとしている。なお東は、ユタ等により病因が説明され、その対処や理解の仕方が物語化し人々に受容され、その物語が現実世界へ働きかけるというプロセスを解明している。またユタ等の知識は、病因を明かすための医療的な側面を待つだけでなく、墓の移動、位牌の扱い、儀礼の方法に及び、まして日常生活の知識の一部をなしているとし、ユタを知識人としても評価している。

従って、存在論的転回の特性を示す研究は、文化人類学者の塩月亮子の『沖縄シャーマニズムの近代—聖なる狂気のゆくえ』である。その中で彼女は、長年にわたる現地調査の

成果を基に、シャーマニズムとしてユタをめぐる信仰の現代の様相を概観している。ユタの活動状況、村落祭司のユタ化、ユタと災因論や死生観の変化を考察している。なお近年になって再評価がなされているユタが、「沖縄らしさ」等として映画や文学の領域において取り上げられるようになった状況を論じている [塩月 2012 : p.91]。従って、ユタの活動のインターネット等の領域への拡大、巫病等を体験した人々による「カミダリー・ネットワーク」と呼べる「自助的ネットワークの出現」というユタの新たな動きを検討している。また「ネオ・シャーマニズム」と比較しながら、インターネット上の「場」と生まれ根強い現地の「場」と同様に重視する沖縄の「伝統的」シャーマニズムの特質を見出している。このように塩月は、近代化、情報化、グローバル化等の中で起こっているユタとユタを取り巻く現象を描き出し、沖縄の民間信仰のダイナミズムについて論考を進めている。

東によるユタ等並びに一般の生活者の視点から民俗医療の全体像を解明するという物語論も、塩月によるユタのインターネット等という新たな領域への関与を分析するという近代論も、存在論的転回をよく示している。これらの研究は、明らかに存在論的人類学の動向を先取りしてはいるが、それに触れているだけである。しかし存在論的転回の特徴を示すような沖縄の研究としては、これまでは両氏の研究があるに過ぎない。情報化やグローバル化に伴うインターネット上でのユタによる活動を取り上げた研究は、塩月の研究しか挙げられない。従って、東によるユタ等と一般の生活者等の発言をそのまま把握するという試みは、あえて言えば徹底的な相対主義とも呼べる存在論的転回への一歩となっているといえよう。

上述した人類学における存在論的転回の学問的な背景としては、アクターネットワーク理論、在来知研究、ポストプルーラル人類学の3つが挙げられるが、その意味が曖昧かつ流動的であり [久保 2016 : pp.192-193]、その全体もまた未だ捉えにくい [浜田 2018 : p.21]。大まかに言えば、存在論的転回の主な趣旨は、人類学の自明視された自然／文化等の区分や多文化・単一自然主義を相対化し、現地調査において出会った人々の思考や概念等をもって、目新しい人類学的概念の創造である。それは即ち、その人々の世界のあり方を彼らの固有の「世界観」（認識論）としてではなく、世界のあり方そのもの（存在論）として扱うことなのである [Henare et al. 2007 : pp.8-10]。

このように存在論・現象学・知識論という近年の研究動向は再び、「ユタ」を研究の対象としているのであるが、それはユタと呼ばれる人々の知識を在来知 (indigenous knowledge) として再評価する流れである。しかし、人類学の学説のパラダイムの流れに照らしてみると、こうした存在論的人類学的研究を推進するよりも、むしろ他の立場を取るべきであり、それについて以下で論じることにする。

4. 「ユタ研究」と知識人類学

以上では、従来民俗学として捉えられてきた研究も文化人類学史に位置づけながら、「ユタ研究」の流れを大まかにみてきた。

このように、ユタを原始的な信仰の進化の段階とする進化論的思考は、1910-1920年代においてなされた僅かな「ユタ研究」を特徴づけており、当時の一般的な風潮を反映しているのである。さらに1960-1970年代に本格化したユタに関する研究は、機能主義の特徴

的な思考を示しており、次に1980年代になると構造主義なパラダイム転換を受けて展開されていく。機能主義と構造主義は、ユタを原始的な信仰であるとされてきた考え方を停止しようとし、当時からこれらが「シャーマン」というカテゴリーにおいて位置付けられ分析されていく。1980-1990年代になると、佐々木雄司（1984）等の精神科医たちにより地域研究が行われ、その成果が大橋英寿によりまとめられ、ユタを心理人類学・医療人類学的な立場から分析する研究が流行になっていく。同時期に、渡邊欣雄により知識人類学が唱えられたものの、沖縄の学者の視野から早く消え去ってしまったのみならず、その「ユタ研究」への貢献が全くといていいほどなかった。知識人類学の提唱者である渡邊は、ユタを研究の対象範囲とはしていないが、彼による知識論を部分的に発展させた小田亮は、ユタを絡めながら「門中化」という問題について検討しているだけである。

長年の現地調査を通して渡邊は、民俗的知識と呼ぶ話者の知識の動態性と拮抗性、またその多様性と変化等に気づき、それらを研究する分野としての知識人類学の重要性を感じ訴えはじめた。それまでの様々な研究により共同体ごとにそういった知識の相違が存在するということが示されていたが、その複雑性や動態的性格は考慮する範囲外であった[Hara 2007 : p.112]。当時こうした知識人類学的な理論的枠組みを導入した僅かな学者は、ユタの問題を研究の対象としていなかった。さらに、それ以上展開されることなく、知識人類学が姿を消してしまったのは、時代の流行りで終わっていったというよりも、沖縄の研究の場合は、その理論的枠組みがまともに受け止めてこなかった、もしくは受け止める必要があると思われていなかった。加えて、沖縄の研究の場合と同様に知識人類学は、少数の例を除いて日本本土でも世界中でも影響を及ぼすことがなく、そもそも人類学の関心事を思い出させる存在としての把握にすぎなかった[Crick 1982 : p.287]。このようにして知識人類学の流行時期がなく、またその重要どころがよく理解されずに、見落とされてしまった。

だがしかし渡邊は、その知識論において知識に対する評価という問題を強調して論じており、それが知識人類学において重要な位置を占める点である[渡邊 1990 : pp.17-24]。ここで繰り返しとなるが、「ユタ」という語も、一人の女性の生き方や知識に対する他人による一種の社会的評価であり、また社会構築的というと、近代化の過程で社会的に構築されたものとなる。存在論的に考えると、「ユタ研究」というのも、琉球弧の女性の特異的な霊威・霊力に対する信仰についての知識への評価の研究である。このようにして、一般の生活者には「ユタ」・「ヤブー」・「ムヌスー」、また多分野の学者には「シャーマン」・「呪医」・「野のカウンセラー」といったラベルが付与され、同一人物に対して複数の解釈がなされてきた。それらは全て評価となっているということが出来る。従ってここでの「ユタ」等の他人からの一種の社会的評価がなされていくメカニズムを解明するということが重要なことであると考えられる。また、それを可能にするのは、社会構築主義、存在論的人類学の結節点にある知識人類学なのである。

現代はIT技術が広く普及しており、ツイッターといったインターネット上のウェブサイトで「ユタ」と呼ばれる人々が自分たちの神秘的な体験を語ったり、また自らを「ユタ」としての活動内容の近況報告を行ったり、あるいは民族誌にだけ記載されてきた儀礼等に関する情報をまとめた知識として発信したりしている。スマートフォンの普及も、そういった情報へのアクセスを簡便化し、それを評価しやすくさせている。このようにして、

「ユタ」としての霊的能力、これらによる助言や考え方、または占いの有効性が論じられ、その女性たちの知識への評価がなされている。また「ユタ」自らが「ユタ」としてライフヒストリーを語る等の本を出版したり、人類学等の分野を学び学問の権威を借りて記述を行なったりすることもあるという時代になっている。

敢えて言えば1990年代に学者は、こんな時代が来るとは思わなかったため、当時提唱された知識人類学を見落したということができよう。だがしかし、以上のような多種多様な資料・書籍等のドキュメントと研究者による分析の間には、知識人類学が提供する枠組みを受け止める必要があると筆者は考える。そもそも、こうした研究においても沖縄に何人の「ユタ」が存在するのかという客観的なデータが示されないにも関わらず、誰もが「ユタ」は少なくなっていないと感じていることを考えてみれば「ユタ」が間主観的存在であることが理解出来よう。「ユタ」は確かに間主観的に「存在」するにも関わらず、アンケートの対象にはなりえないことは理解していただけたらと思う。

だからこそ、一般の生活者による評価と学者による評価を同列に扱い、知識人類学研究をする必要があるのである。これまでなされてきた「ユタ研究」による成果が極めて重要なものでありながらも、こうした知識人類学研究を導入するという事は、その研究を発展させる方法として考えられるのである。

さらに、科学技術が急速に発展しつつある今日では、AI時代の到来も予想される中で、「ユタ」のそういった領域への関与も考えられないというわけではない。しかしながら、その際に科学技術の人類学や存在論的人類学の研究を進めるために、まずその段階以前の研究を行う必要があるだろう。それは即ち、現象学的人類学の流れに位置づけられるべき知識人類学なのである。

5. 本研究の展望とフィールドワークについて

このように、時代の推移とともに、霊威・霊力を有すると信じられてきた女性が生きている世界も大きく変化しつつあるということができる。その女性の霊威・霊力に対する信仰についての知識への他人からの評価が、あらゆる手段を通してなされ、「ユタ」であるとか「ヤブー」であるとかという社会的なラベルが付けられている。従って、知識人類学的にそのメカニズムを解明するという事は、極めて重要な課題であり、筆者はそれを博士論文の主な目的としている。

その目的を達成するために、そういった女性の生き方や有する知識に対する評価がなされる過程を吟味し、ある共同体において一般の生活者が特定の人物を「ユタ」であるとか「ヤブー」であるとかとして解釈し評価をする根拠・理由も、なおそのような人物の有する知識自体も分析対象とする。

以上を踏まえ、本論文では調査方法として、インターネットの調査、現地調査、参与観察を考えている。以上で述べたように、インターネット上のウェブサイトでは「ユタ」と呼ばれる人々に対して、一般の生活者に評価がなされ、これらについての意見が交わされており、それらを考慮の範囲に追加する必要があると考える。また、フィールドワークに出、そういった評価や意見、その理由や根拠についての現地の生活者との面接調査を行うことが不可欠である。さらに、現地の「ユタ」や「ヤブー」と言われる人物の家族構成、友達関係のあり方、その環境や家庭、考え方や世界観、なおこれらの持つ知識自体等の生

活全体についての情報を、参与観察を通して把握する。この研究は、現象学的に位置付けるべきであり、客観的、量的な調査に基づいた研究ではなく、間主観的なものであるということ、ここでも強調しておきたい。表題に示した「民間治療師」という通常「ユタ」には含めないであろう境界的な人々にあえて焦点をあてるのは、「ユタ」が社会的に構築される過程を調査するのに適していると考えからである。

以上の琉球弧の「ユタ研究」の大まかなレビューにより、これまで「ユタ」と呼ばれてきた琉球弧の女性の生き方や知識への評価がどのようになされていくのか、その社会的なラベルが付与されていく過程を解明するという重要な課題を試み、筆者は「ユタ研究」に貢献したいと考える。これまでの「ユタ研究」は、単に「ユタ」を研究するというだけではなく、沖縄社会におけるあらゆる変化がよく反映されている研究領域でもある。筆者の研究もまた、そのような一つの研究となれば、その目的が一層高まってくると考える。

注

- 1) ユタのほとんどは女性であるが、男性のユタも時に見られる [桜井 1973 : p.3]。
- 2) 民俗社会 (folk society) というのは、政治的意思を表現できない等のような過去の社会、1960年代にもう既に見られなくなってきた社会 [Lebra 1985 : p.206] を想起させる語となっているため、本稿では「市民社会」という言葉を使うことにする。

文献

- 東 資子 (2018) 『治癒と物語—南西諸島の民俗医療』 森話社、東京。
- 伊藤泰信 (2000) 「知の状況依存性について：知識人類学試論」『社会人類学年報』第 26 号、pp.97-127、東京。
- 稲村 務 (2016) 「柳田国男の「常民」概念についての資料的再検討—「日本文化の伝統について」『近代文学』および「常民婚姻史料」「耳で聞いた話」『人情地理』—」『人間科学』第 35 号、pp.1-82、沖縄。
- 稲村 務 (2017a) 「「伝承／伝統的知識」概念構築のために—民俗、フォークロア、常民—」『人間科学』第 36 号、pp.105-144、沖縄。
- 稲村 務 (2017b) 「民族学者・柳田国男—座談会「民俗学の過去と将来」(1948)を中心に—」『人間科学』第 37 号、pp.189-260、沖縄。
- 伊波普猷 (1974) 『古琉球』 平凡社、東京。
- 伊波普猷 (2014) [1913] 『ユタの歴史的研究』 青空文庫、東京。
- 大橋英寿 (1984) 『シャーマニズムの社会心理学的研究』 弘文堂、東京。
- 小田 亮 (1987) 「沖縄の『門中化』と知識の不均衡配分—沖縄本島北部・塩屋の事例考察」『民族学研究』第 51 号、pp.344-374、東京。
- 加藤九祚編、pp.89-121、日本放送出版協会、東京。
- 久場政彦 (1986) 「沖縄社会における民間医療職能者の特質—ヤブーを中心に—」『沖縄文化』第 23 号、pp.55-69、沖縄。

- 久保明教 (2016) 「方法論的独他論の現在—否定形の関係論に向けて」『現代思想』第 44 卷、第 5 号、pp.190-201、東京。
- 小池 誠 (1991) 「知識の社会人類学」『社会人類学年報』第 16 号、pp.193-208、東京。
- 佐喜眞興英 (1925) 『シマの話』郷土研究社、東京。
- 桜井徳太郎 (1973) 『沖縄のシャマニズム 民間巫女の生態と機能』弘文堂、東京。
- 桜井徳太郎 (1979) 「沖縄民俗宗教の核—祝女 (ノロ) イズムと巫女 (ユタ) イズム」『沖縄文化研究』第 6 号、pp.107-147、東京。
- 桜井徳太郎 (1984) 「南西諸島シャマニズムの源流」『日本のシャマニズムとその周辺』
- 佐々木宏幹 (1984) 『シャーマニズムの人類学』弘文堂、東京。
- 佐々木雄司編 (1984) 『沖縄の文化と精神衛星』弘文堂、東京。
- 塩月亮子 (2012) 『沖縄シャーマニズムの近代—聖なる狂気のゆくえ』森話社、東京。
- 高良倉吉 (1989) 『琉球王国史の課題』ひるぎ社、沖縄。
- 滝口直子 (1991) 『宮古島のシャーマンの世界—シャーマニズムと民間心理療法』名著出版、大阪。
- 浜田明範 (2018) 「存在論的転回とエスノグラフィー：具体的なものの喚起力について」『立命館生存学研究』第 1 号、pp.21-31、京都。
- 馬淵東一 (1974) 『馬淵東一著作集第一巻』社会思想社、東京。
- 渡邊欣雄 (1990) 『民俗知識論の課題—沖縄の知識人類学—』凱風社、東京。
- Boyer, Dominic (2005) “Visiting Knowledge in Anthropology: An Introduction”, *Ethnos*, Vol.70, no2, pp.141-148.
- Cohen, Emma (2010) “Anthropology of Knowledge”. *The Journal of the Royal Anthropological Institute*, Vol.16, pp.193-202, Hoboken.
- Crick, Malcolm R. (1982) “Anthropology of Knowledge”, *Annual Review of Anthropology*, Vol.11, pp.287-313, Palo Alto.
- Eliade, Mircea (2011) *Szamanizm i archaiczne techniki ekstazy*, Aletheia, Warszawa.
- Hara Tomoaki (2007) “Okinawan Studies in Japan, 1879-2007”, *Japanese Review of Cultural Anthropology*, Vol8, pp.101-136, Tokyo.
- Henare, Amiria, Martin Holbraad & Sari Wastell (2007) *Thinking Through Things: Theorising Artefacts Ethnographically*, Routledge, Abingdon.
- Lebra, William P. (1985) *Okinawan Religion. Belief, Ritual, and Social Structure*, University of Hawaii Press, Hawaii.
- Szyjewski, Andrzej (2005) *Szamanizm*, Wydawnictwo WAM, Kraków.